

2007年10月初旬、左脚の太ももから付け根の辺りに痛みを感じるようになった。整形外科を受診し左大たい骨が溶けていることが判明。紹介された総合病院の腫瘍整形外科医のレントゲン画像を見た最初の言葉は「こりゃあ折れるで」だった。実は前から左胸にしこりがあった。精密検査の結果、転移性乳がん多発骨転移と診断された。

乳がんが診断されたその日から骨折を避けるため左脚に体重をかけることを禁止され松葉杖生活がスタートした。乳腺外科の医師からまず乳がんの治療を最優先で考えるということで、化学療法の抗がん剤タキソールを提示される。脚の治療はその後で考えようと。その医師の口から出た「折れたら折れた時。」という言葉が心にひっかかった。夫と私は乳がんも脚もすぐに治療してもらいたかった。なんとか歩けるようになりたかった。

そこでインターネットで同じような症状の方のブログで情報を求めたり、乳がん患者会の方にもアドバイスを頂いた。

それからセカンドオピニオンを取り放射線科のある病院に転院した。ある腫瘍マーカーは7000！でも新しい主治医は「骨では死なへんよ。」ホッとした。私は「どうかできるだけ長く少しでも元気で生かしてください。」主治医は「大変だよ。長い厳しいものになるよ。」私「はい、頑張ります。」何か希望がわいた。

12月に入院し左脚に放射線治療、年明けに補強のチタンの棒を入れる手術、乳がんにはホルモン治療と骨を強くする点滴のゾメタを受けることになった。一旦退院し手術まで車椅子と松葉杖で頑張っていたのだが、翌年1月下旬風呂場での思わぬ転倒で左大たい骨はあっけなく折れた。人生初救急車のお世話になり手術まで三日間寝たきりの生活。骨折による激痛で体を動かせない。自分で何もできない惨めさ、情けなさで涙が出た。

手術後のリハビリでは、病的骨折のためなかなか足を地面に着ける事が許されずひたすら松葉杖で廊下を往復し体力をつけた。歩き方を忘れてしまいアヒルのようにしか歩けず不安になったが、厳しくも優しいリハビリの先生に励まされ元気になっていった。自分の足で電車に乗り旅ができる、映画館や美容院へ行ける、当たり前になってきた事が再びできるようになった今が愛おしい。こうなったら開き直って希望を胸に暮らしていこう。そして、私を支えてくれた全ての人への感謝を忘れずに過ごしていきたい。